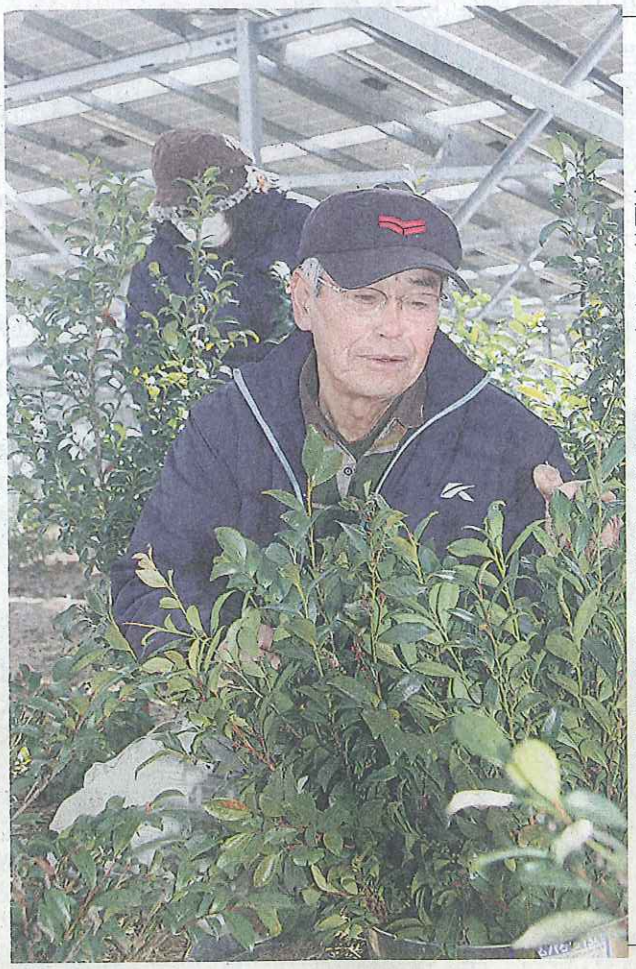
東京新聞　2017年（平成29年）3月7日（火曜日）　埼玉中央　地域

祭礼用サカキを初出荷

美里町　太陽光パネル下で栽培



太陽光パネルの下でサカキを収穫する担当者＝いずれも美里町で

美里町の農業法人「万葉ファーム」は、同町広木の太陽光発電パネルの直下で栽培していた祭礼用の樹木サカキを初出荷した。サカキは直射日光に弱く、パネルで日差しを遮ることで栽培に適した条件を確保する。かつての遊休農地が、発電と畑作という「一挙両得」の地に生まれ変わった例として、関係者の注目を浴びそうだ。（出来田敬司）

遊休地活用、発電＋畑作を実現

太陽光発電施設は一般社団法人「メガソーラー機構」（東京都港区）が運営し、十㌶の用地に百五基が稼働している。発電量は年間五メガワット。全量を東京電力に売却しており、同町の一般家庭三千八百世帯の四割をまかなえるという。

サカキはメガソーラー機構から委託を受けた万葉ファームが生産。国内最大の約一万六千本が、パネルの日陰部分に植栽されている。サカキは常緑の中高木で一年中出荷できるが、正月需要に合わせて十一月ごろが出荷のピークとなる見込み。

メガソーラー機構は二〇一四年の太陽光パネルの建設に当たり、直下での畑作を計画した。土地を有効利用できるだけでなく、農地をそれ以外の用途に転換する「農地転用」の必要がないため、複雑な手続きを必要とせず、税制上利点もあった。

太陽光パネルの下に広がるサカキの畑

日陰に適した農作物が少ない中、神棚や祭壇に供えるサカキが浮上。サカキは中国からの輸入物が国内需要の九割を占めるが、用途の性格上、国産を求める声も強いという。パネルにより葉の日焼けだけでなく、霜害を防ぐこともできる。パネルを通常より高い地上二・二～三・七㍍に設置することで、直下での農作業をしやすくした。

初出荷の二月二十三日、万葉ファームの担当者はパネルの下に潜り込み、サカキの木約千本を裁断した。万葉ファームとメガソーラー機構の関係者が町内で出荷を祝う式典を開いた後、東京都青梅市の卸業者に納入した。

今回の試みは遊休農地の活用だけでなく、万葉ファームの社員十数人の雇用にも結びついた。田村勝社長は「サカキは栽培から三年がたち、ようやく出荷できた」と感慨深げ。メガソーラー機構の清水武司理事長は「美里町など県北部は日照時間が多く、太陽光発電に適している。さらに事業を広げていきたい」と述べた。